定　稿

令和２年度宮城県立高等学校入学者選抜審議会
第１回専門委員会　記録

令和２年９月２４日（木）１４：００～１６：００
県行政庁舎９階　第一会議室

＜専門委員＞
田端　健人 委員長，佐々木　奈緒子 委員，河本　和文 委員，中里　寛 委員，小山　順子 委員
葛西　利樹 委員，早川　健次 委員，岡　邦広 委員

＜県教育委員会及び仙台市教育委員会＞
松本　文弘 教育監兼教育次長
遠藤　浩 参事兼高校教育課長
岩井　誠 仙台市教育局学校教育部高校教育課長
（欠席：伊東　昭代 教育長，小林　一裕 理事兼教育次長）

事務局	（資料の確認）（公開の確認）
	（開会）
事務局	（委嘱状・辞令交付） （委員の紹介）
松本教育次長	（教育次長あいさつ）
事務局	（県教育庁関係出席者紹介）
事務局	（概要説明）
事務局	（委員長・副委員長互選）
委員長	（委員長あいさつ）
事務局	（委員長　司会進行開始）
委員長	では，次第に沿って，始めてまいりたい。 まず，令和２年度第１回高等学校入学者選抜審議会の報告をお願いする。
事務局	（事務局より説明）
委員長	概要を説明いただいた。この後それぞれの内容を掘り下げていくが，現時点で御質問，御意見があればお願いする。
委員	（特に無し）
委員長	では，審議に移る。宮城県立高等学校入学者選抜への全国募集の導入について，事務局から説明をお願いする。
事務局	（事務局より説明）
委員長	以上の説明について，御質問，御意見があればお願いする。
河本委員	全国の状況を大変詳しく調べていただいたことに感謝する。全国募集は県内の公立及び私立高校に大きく影響する内容であるので，その他の学校への影響等も踏まえながら，検討していきたい。
葛西委員	志津川高校は南三陸町唯一の高校であり，南三陸町から全面的なバックアップを受けて，高校魅力化協議会を立ち上げた。今，全国募集についての提案を町から県に，要望を出している。昨年は町では全国募集についての協議会を７回開催し，検討結果をまとめて提案をした。９月上旬には，町が住民説明会を開催して，志津川高校の魅力化を高める上での，全国募集のメリットとデメリットを含めて説明している。 中学生や高校生の数が減り，また住民の数も減っている中で，全国から人を呼んで高校の活性化を図るということ，及び地域の発展に貢献できる人材を作るということについては，住民からは概ね理解を得ていると考えている。しかし，大きな問題点として

	挙がっているのは，財源の問題，住まいの問題，そして身元引受人の問題である。協議会に財源部会，それからカリキュラム部会，それから全国募集に関わる情報発信部会，三つの専門部会を設けて，検討しているところである。 　この全国募集が，過疎化が進んでいる地域の小さな高校を活性化する上で，大きな柱になるということを職員及び町の方々とも共有しながら，現在協議を進めているところである。
早川委員	詳細な資料を作成いただき感謝申し上げる。 　４７都道府県のうち３５道府県においてすでに始まっているとなると，全国募集に関して宮城県はどちらかというと後発県ということになるかと思う。宮城県としての特徴を示していかないと，埋没してしまう恐れがある。その辺のことも踏まえて，ぜひ検討を進めていきたいと思う。
岡　委員	説明の中には全国募集の４つのタイプについての紹介があったが，１番目から３番目までについては，大きく捉えると学校の特色化と捉えることができると思う。しかしながら，現在の宮城県の入試制度から考えると，４番目については難しいと思う。なぜなら，倍率の高い学校では，県内の受験生を圧迫するということにもなり得るからである。倍率のあまり高くない学校にとっては手助けになると思うが。 　新たな取り組みが必要になるかと思うので，そこを考えることが今回の課題になる。
小山委員	中学校の立場から話をしたい。全国募集については，中学校にも他県からの通知がたくさん来ている。生徒たちにもちろん知らせるが，埋没してしまってなかなか浸透していかないというところを，中学校の現場としては感じている。 　そのあたりを宮城県としてどのように考えていくかというところが大事になってくると感じている。
中里委員	全国では，すでに３５道府県ということでかなり広がっているなという感想を持った。趨勢で言えば，導入する方向で検討するのは当然の流れだとは思うが，逆に導入している道府県が多いということであれば，あえて資料１ページの２の「実施する主な理由」を再確認したいと思っている。 　小規模校での定員確保，地域活性化，部活動という３点があるが，ただ全国的な流れだからということではなくて，宮城県にとって必要なのかということをしっかりと議論していきたいと考えている。
佐々木委員	この資料を見て，全国募集は，実施しなければならない時期に来ているということは分かるが，宮城県の方では，県立高等学校将来構想委員会でも検討していることがあると思うので，そちらの状況を聞きたいと思っている。 　生徒数の確保ということはあると思うが，子どもの数が減っているのは宮城県だけではなく，全国的なことである。どこも子どもの取り合いになっている。そのような全国的な状況は理解できるが，子どもを集めようとすると，お金が必要となる。財源を使うということは宮城県にプラスにならなくてはいけないということを，根本から考えていかないと話にならないのではないかなと思った。
委員長	先ほど佐々木委員から話題に挙がった県立高等学校将来構想委員会について，事務局の方から説明を願う。
事務局	平成３１年２月に，第３期県立高校将来構想を策定している。 　特色ある学校や学科の設置のほか，新しい学習形態の導入や専門性の高い特徴的な教育を行う学科に関しては，募集方法の特例について検討するという記載があり，この募集方法の特例というところについては，全国募集も想定したものになっている。この全国募集を検討していくことについては，将来構想にも沿った流れであると考えている。
委員長	委員の皆さんの意見に感謝する。他に質問や意見はあるか。別冊２の見方について，何をもって成功というか議論の余地があるが，どのように選んでいるか。
事務局	特色のある学校の中でも，比較的出願者数，もしくは入学者数が安定して確保できている学校を主に掲載している。それと東北の学校についても気になるところであるので，掲載した。 　１ページ，岩手県の葛巻高校と山形県の遊佐高校は，どちらも地域と連携した取組をかなり活発に行っており，葛巻高は山村留学という特色により，多くの他県の出願者が

	入学している。遊佐高校についてはまだまだ，実績についてはそこまでではないが，コーディネーターが存在するなど，魅力化が図られこれから伸びるだろうということで掲載した。 　２ページ，宮崎県の飯野高校は実績がほとんど無い。平成３１年度は０名であった。原因は広報がうまくいかなかったようである。そこで，先に紹介した地域・教育魅力化プラットフォームにお金を払って登録し，地域未来留学のフェスタに参加した結果，昨年度は４名の生徒を確保した。飯野高校の先生に直接，話を伺ったのだが，その４名については，入学後，校内の生徒にとってかなりプラスに働く，つまり刺激を与えてくれているということであった。 　隠岐島前高校に関してだが，隠岐島前高校が全国募集を有名にしたと言っても過言ではない学校である。廃校の危機から，学級数増につなげたことでも有名なところである。 　３ページについても島根中央高校，津和野高校と島根県が続いているが，島根県全体として過疎化が進んでいるので，全国募集に力を入れているということであった。両校に共通しているのは，地域と連携を図っているところである。 　４ページ，愛媛県の弓削高校。全国募集を開始したのは，最近であるが，こちらも特色のある活動を行っている。さらに町の全面的なバックアップが素晴らしい例である。寮を設立した後に，志願者数が増えたということである。 　次に，５ページから６ページは全てではないが全国的に特色のある取組をしている例として，長野県立白馬高校，岩手県立種市高校，島根県立情報科学高校，あと長崎県対馬高校を挙げた。 　７ページは，部活動での活躍を期待した例に関しては，こちらも全てではないが傾向が掴めればということで，競技の種類がどうであるかというところに観点おいて，一覧表にした。 　あと８ページ以降については，先ほどから紹介している地域みらい留学参加校のすべてを掲載している。ＰＲ文を抜粋してまとめたものである。 　昨年度の実績なので，中には県外留学ゼロと記載されているものもあるが，今年度から実施している場合もあるので，０だからといって実績がないというわけではない。ＰＲの部分に注目して欲しいと思って資料を作成した。 　説明は以上である。
委員長	ここで休憩に入る。
	（休憩）
委員長	それでは再開する。引き続き事務局から検討事項について説明を願う。
事務局	（事務局より説明）
委員長	まず（１）学校の魅力アップの項目について意見があれば発言を願う。
委員	（意見無し）
委員長	それでは（２）地域の活性化の項目について発言を願う。
葛西委員	南三陸町では平成２９年に公営塾を開設した。公営塾には専門の支援員がおり，部活が終わった後に生徒たちが通って学習している。全国募集を実施している学校の中にも市町村の財政負担で設置しているところがある。本校としても全国募集の大きな柱と考えているが，地域の方々と情報交換をすると，公営塾は学力向上や実績の向上につながっているのかといった質問が出る。また，全国から人が来たとしても，それが果たして学校の学力向上に繋がるかという質問が多く出る。それらに対する目に見える成果の１つの指標として出てくるのが大学への進学実績なのだと，先日の住民説明会では感じたところである。 　一方，本校では，地域創生といった観点からの新しい系列を設けて，令和４年度から普通科の新しいカリキュラムでスタートしようと考えているところだ。これらについても地域の方々からの意見や要望等を受けて，取り入れているわけだが，先ほど申しあげた実績として大学進学の実績を伸ばして欲しいという要望が強くて，学校がその要望にどれだけ答えられるかということは心配な要素になっている。

	地域に根ざし，地域と協力した学習活動を行っているが，目に見える大学進学実績に果たして直接結びつく成果となると言えるのかといったことについては，やはり現場でも非常に悩んでいるところである。
中里委員	私は石巻の勤務経験もあるので，少し広い視野から迫ってみたいと思う。やはり宮城県の特色や魅力を考えていかなければならないと思う。色々な見方があるかと思うが，私は，我が県のアイデンティティーは豊かな農業・水産業，そういった産業であると考える。これからの時代せっかく宮城県や各地域に人が帰ってくる良いタイミングであるのに，それらの産業が死んでしまっていたら，宮城県ではもうその人材を育成する学びの場が，これからは厳しい状況になっていくだろう。したがって，そのような産業等にスポットを当てていくという大事な視点だと考えている。 例えば水産業についてお話をさせていただくが，皆さん牡鹿半島に小学生が何人ぐらいいるかご存知か。あそこはもう１００人切っている。ところが，私たちがスーパーで見る，牡鹿の漁師たちが収穫したホヤであるとか，水産物・海産物は驚くほど大量に出回っている。震災の際，学校は壊滅的な状態になり，さらに水産業も大打撃を受けた。今はもう牡鹿の漁師も，半分以上が石巻市からの通い漁師となっている。ところが，半島内には３つの小学校があるが，ある集落には，子どもたちの声が元気に響いている。高台に移転をして住んでおり，地元に戻りはじめた漁師たちが，ネット販売でホヤを売るなど６次産業をやっている。そういったものを今後も持続させていくためには，そのような地域でも学び場があることを，保持していくというか，何とか確保していく必要がある。特にどこの水産高校とかというわけではないが，地域の特徴，世界の３大漁場を抱えた宮城県の特色を踏まえた学びの場というのは，何とか死守していきたいと思っている。県外の意欲溢れる皆さんに，できればそういった宮城県の魅力を伝えて，来ていただき，専門的な学び，さらにはそのまま生業に結びつけられるような学びをしてもらうことが非常に重要な視点だと私は考えている。 今，水産業の話をしたが，それだけではなく，農業・林業等も宮城は素晴らしいもの持っているので，今の定員割れで厳しい学校を，ぜひ地域と一体となって進めていく必要があるのではないか。これも学校の魅力づくりに繋がってくるかもしれないが，産業界とか，地域も含めてやっていく必要がある。以上のことから，私は地域の活性化から見た高校のあり方，募集のあり方を前向きに検討する必要があると考えている。
委員長	貴重な意見に感謝する。今回はできるだけいろいろな意見をいただきたいと思っている。関連するしないを含めて，自由に発言いただきたい。
佐々木委員	学校の魅力アップというところだが，宮城県の高校においては，普通高校が多過ぎると私は感じている。例えば高校卒業して資格が取れる学校，大学に行かなくてもそのまま就職ができる学校，もうちょっと学びたければ大学に行ける学校がもっとあると良い。また，例えば介護業界であるが，人手不足だと言われているにも関わらず，宮城県では看護科が大変少ない。そのように要望がある学科を作って欲しいと思っている。 現在，住まいは大崎地区の某町に住んでいるが，近くの学校は定員割れしているような状況である。定員割れしている学校をどうしたいかとなっても，例えば，市の議会などでは無くして欲しくないという意見は当然出ている。しかしながら，では無くさないためにはどうしていくべきかという話し合いが，今のところマッチしていないのではないかと私は思っている。先ほど葛西委員が言われたような町と一体となった動きを，例えば県がタイアップできる状況であれば良いと思うが，議会を聴講しても，そのあたりの熱い気持ちが感じられない。子どもを育てるにあたっては，自分の子どもに魅力のある学校に行かせたいというのが親の気持ちであるし，例えば大学に行かせたいというのも親の気持ちであるのだが，子どもがその学校に行きたいとなるような魅力のある学校をぜひ作っていただきたいと思う。
委員長	発言感謝する。今の話からも，議会も含めて，市町村のニーズとか，意識があまりないところに無理に全国募集をしていく話ではないのかなというような印象を受けた。他にあるか。 それでは（３）全国的に特色のある学科での学びの項目について発言を願う。
中里委員	３番のところで言えば，高校の先生方からすると当たり前の発想になってしまうが，例えば多賀城高校の災害科学科がある。これから南海トラフが原因となる地震が現実

	的に起こるだろうと言われている中で，全国からそういった防災意識の高い生徒，志を持つ生徒たちを集めて，宮城の高校生とともに学ばせるということは，これは県に対して大きなメリットがあるだけではなく，その学校で学んだ後，全国に戻って，これからの日本の防災を背負って立つような若者を作っていく大きな機会になると思っている。本当単純な発想であるが，そういった宮城県には全国に誇れる学科が幾つもあると思う。そのような学校においてはぜひやってみたらいいのではないかと私は思っている。
委員長	それでは（４）特定の部活動の競技力向上の項目について発言を願う。
佐々木委員	部活動について考えると，私学と国公立では先生たちが在籍できる年数や，競技に対する指導力のある先生方を連れてこられる財力に違いがあるのではないかと思った。 例えば，指導力のある先生がいても，その先生がすぐに成果を出せるわけではなく，４年や５年続けて指導されて，ようやく実績とともに学校の名前が知られてきて，それによって生徒が集まりはじめるという時に，転勤しないというような状況を作れるのであれば良いのだがと思った。例えば，柔道について見ると，私学には全く県内の生徒はいない場合がある。また，ある公立高校では，町内だけではなく，遠い地区からも生徒が集まって強いチームを作っている。また，顧問の先生方がかなり熱心に指導されていて，子どもたちを強くするためにどうしていったら良いか，かなり勉強されている。そうなってくると顧問の先生方の負担がすごく増えるということも見てきた。でも，そのような顧問の先生方だから，大学の学生と一緒に練習をできる場を作ることができるのかなと思った。 もし，部活動での魅力づくりとなると，例えば中学校から見に来られる状況だったり，中学校から引っ張れる状況だったり，大学に力を借りたりとか，そういうところまでやらないといけない。ただ，高校３年間だけの特色というわけにはいかないと思う。
河本委員	私は私立高校にいるが，私立高校も現在の少子化に対して非常に苦労しているところであり，実際のところ募集定員が満たしている学校は数校しかない。その他は定員を割っているという状況である。その点を踏まえて，私立高校では各校が必死に特色作りをしており，選ばれる学校になるため，各校が動いている状況にある。 確かに部活動で全国的に有名な学校が幾つかあるが，その特色が多くの人を集める要因に実際にはなっているわけではない。 もちろん，ある競技によって学校の知名度が上がる，またはその学校はそういう学校であるということに魅力を感じて選んでくる生徒はいるかと思うが。なかなかそのあたりは難しい状況である。 私立高校において，全国から生徒を呼び寄せたりした場合には，その生徒の将来までしっかりと面倒見てあげなければ，実際には生徒たちは集まってこない状況である。公立高校で，特定の部活動の競技力向上という形で，生徒たちを集めるならば，先ほど佐々木委員からも話が出たように，しっかりと生徒たちが満足できる環境を整えてあげないと，結局は人が集まらなくなる。その環境設定というのが非常に難しいことである。地域全体で，全面協力した形でやっていかないといけない。どのような観点にしても，全国募集の一番の大事なところは，その高校選んできた県外の生徒がしっかりと３年間，満足の行く，達成感を得るような，学校生活が送れるかどうかが第１のポイントになると思う。その県外から来た生徒を，地域活性化とか，競技力向上とかの道具にしてはいけない。そういう点を考えて，４項目すべてについて，前述のことを前提に検討すべきではないかなと思っている。
委員長	生徒の３年間，或いは将来のところまで面倒見るという，非常に大事な意見だった。
岡　委員	かつて宮城県には学区制があった。各地域に，それぞれ色々な学校があって，その地区の出身の子たちがその地区の学校へ入って，そこで学ぶということだったのだと思う。したがって，各地域によって大きな差が生じないようにということを心がけて学校の運営というのが，おそらくなされてきたのだと思う。 今宮城県内の公立高校においては全県一学区で，どこにでも進学できるようになっている。そこで初めて色々な学校の特色，特徴というものが，クローズアップされてきている。今はそれが行われている途上なのであると考えている。ここまで話があったように，地域と強く結びついているという学校もあるし，それから珍しい学科，例えば松

	島高校の観光科であるとか，宮城野高校の美術科であるとか，県内に１つしかないという学校もある。それらの学校については，県内の子どもたちにとって，一体どんな魅力を持っているのかということを知ることが大事なのだと思う。県内の子どもたちにとってあまり魅力がないのであれば，県外の子どもたちからもやはり同じように見られるということが言えるのだと思う。あとは，県内に１つしかないということである。例えば多賀城の災害科学科のような防災系の専門学科については，全国にも二つしか存在しないので，そこでは，広く勉強してもらおうということでの意義は確かにあると思う。したがって，一概に県内のすべての学校に，全国募集を行うものではないと考えている。全国募集について考える意義はあるとは思うが，その際には宮城県として，どのあたりを重点として考えるかというところは，よく考えていかなければならないと思う。 　部活においては，先ほど河本委員からも話があったように，最後まで責任を持ってあげられるような体制でないと，子どもたちを呼び寄せることは非常に難しいと思う。部活において県内で数少ないチームもあると思うので，その部活動の運営に，やはり全国から集まってもらったほうがいいのか。それとも，県内だけで何とかしたほうがいいのか。それは個別の考えに基づかないといけない。 　全国募集については選択肢としては，作っていくべきだと思うが，それをすべてのところに導入するかどうかということはまた別な問題だと思う。やはり一つ一つ考えていかなければならないのではないかと思う。
委員長	発言感謝する。それぞれの地域，また学校での特色をつくることは必要だが，全部の学校に導入するというわけではないという意見だったと思う。
早川委員	宮城野高校美術科は県内で一つ，公立高校の中で一つということで名前は出たが，今日の話の流れの中では，本校は仙塩地区にあるので，全国募集の学校には該当はしないのではないかと正直思っている。 　入試の倍率もある程度あるし，本校の方で実技講習会も行ったが，やはり関心のある中学生が結構集まってくれて，県内の遠くの方からも来ていただいているので，本校の美術科の魅力ということについては，ある程度，中学校にも浸透していると思っている。いろいろ複数の委員の方々から話があったように，この３年間の高校生活の充実ということは当然だと思う，私個人的には，卒業の先のところまできちんと見た形でないと，例えば高校３年間が終わってその地域に戻すということのための全国募集なのか。宮城県に永住も視野に入れたところまでのトータルでの全国募集なのかというところが個人的にはなかなか判断がついていないところだが，高校３年間の先ところまで踏まえて考えると，やはり地域の協力がなければ絶対にできないことだ。また，先ほどの葛西委員も言っていたが，学校のジレンマというものもあって，どうしても進学させるというのが目先ではよく見えるが，各地域の方から例えば関東の方に出ていって，その後戻ってくるのかと言われると分からない部分がある。そうすると，生徒は育てたけども，地域の人は逆に言ったら輩出する形になるのかなというところもある。色々と難しい点はあるが，先ほどのことで言うと，その地域で働く場所というところまで，例えば就職先も地元でもありますよということなど，他の都道府県からやってきた生徒なのだけど，最終的にはその地域で，生活を始めるという生徒も出てくるところまで考えなければいけないのかなと個人的には思った。
委員長	高校３年間の後のところをどう考えるか，その後も地域に残っていただくようなことを構想しながらの全国募集なのか，他県への進学でもよいというような地域や学校の判断での全国募集なのかというところで，魅力の作り方も違ってくるかと思う。 　それでは（５）条件無しの項目について発言を願う。
委員長	これについては，すでに岡委員はじめ，別の観点からも条件なしというのはあまり意味がない，或いは，県内の倍率の高いところは県内の受験生への圧迫になってしまうというようなことということが今までの意見にあったかと思う。 　いや，そうではなくて，条件無しということにもメリットがあるという考えがあったら意見を願いたい。 （意見無し） 　では，この条件無しというのは，これまで出た意見から，本専門委員会ではメリッ

	トはあまりないという方向のまとめでよろしいか。
委員	（異議無し）
委員長	他に意見を願いたい。他の観点でも構わない。 先ほど，葛西委員の事例を伺った際に，大学進学という目に見えるところと，探究学習とか地域を学んでいくという意味での学校の活性化とは，地域との声とずれがあるように思われるが，意見願いたい。
岡　委員	地域の活性化というのは結果的に起こることだと思う。だから，もし全国募集ということに着手していくのであれば，その学校にどういう特色があるかというところ，さらにその延長上に，学校の魅力というのがあるのだと思う。それとまた一つ別の見方で，部活動についてはどこにでもあるということではなく，この学校に行かないとできないという，ある程度特殊な競技・分野になってくるのではないかと私は考えている。そういう特殊な部活動については，広く募集してもいいのではないかと思う。ただ，いずれにしても，子どもたちが移り住んでくるということは子どもの生活をどのようにアシストするかということが大切になる。そのためにも地域の協力というのが欠かせないものだと思う。だから，学校と地域がどれぐらい理解し合って，協力をしてもらえるのか。そして，学校は県外から来る子どもたちに，どういうことを提供できるのか。それらのことが非常に大事なのだと思う。 それから，ここに募集定員の充足率という言葉が記載されている。先ほど宮城野高校からも意見あったが，入試の倍率が高く，いつも人が集まってくるところでは，やはり県外からの子どもを新た全国募集してというのは難しいと思う。かといって，先ほど愛媛県の方では０．８倍とかあったが，その基準をあまり低くしてしまうと，これもまた，活性化とか魅力をアピールするのは難しくなってくると思う。そのため，はっきりした数字を上げることが良いのかどうか迷うところである。１倍にも満たなくなっているところが，一つ対象になるのかなと。 あとは，特色のある部活等ですが，特殊な部活動にあまり人が集まらなくなっているとか，そういった時には対象とすることを検討してもいいのではないかとは考えている。
委員長	その地域から高校がなくなっていくとか，充足率を満たさないということになってくると，子どもの声が地域から消えていくと，地域はどんどんしぼんでいくことになろうかと思う。そういうことからしても，どう活性化するか，いろいろと地域ごとの考えがあるかと思うが，極力小中高とも，元気で教育活動を行ってもらうことが前提になるかと思う。そういう中では，やはり地域の方の自覚も危機意識みたいなものも，もしかすると大事になってきて充足率が０．８倍未満になってくると，負のスパイラルにも入ってくることもあると思うので，地域が学校とタイアップして先取り的に１倍あたりを目処とした条件等もあって良いかとも思う。
小山委員	全国から募集したからには満足のいく高校生活をという話が先ほど出たが，逆に，やはり宮城県内の子どもにとっても，やはり全国から生徒が来たことで，良い影響を受けたというような，実感が伴うとか，或いは将来的には全国に散らばっても，そこで何か繋がりが持ち続けられるとか。そのように県内の子どもたちにとっても，メリットがあるということを十分に発信していくことも，宮城県内の子どもたちにとっては，すごく大事なところだと考えている。 中学生を見ていると，強く全国に目を向けることがなかなかできない状況である。しかしながら，やはり自分たちの生活している地域以外にも視点を持たせること等は中学校の段階から，大事にしていかなければならないのだなということを，改めて今回のいろんな委員の方々の話を聞いて，実感したところである。
河本委員	資料の４つの観点でいくと，２番目の地域の活性化と３番目の特定の部活動の競技力向上については，それなりに全国募集する価値はあるのかなと感じている。 実際のところ，仙台市内のように高校がたくさん密集している学校，人が集まる地域にとっては，倍率が低くなってもいくつかの学校が統合されて定員が整理されていくことが可能なため全国募集はあまり必要ではないかもしれないが，先ほど話しを伺った志津川高校の地域などは，その地域の唯一の学校のため，あるかないかという状況になってしまう地域だと考えると，その地域の人たちにとっては地元の高校がなくなっ

	てしまうというような恐怖感というのは非常に大きいものだと思う。家庭の状況等によっては，他の地域に通学させるということも可能かもしれないが，他の地域に通学させて教育を受けさせることができない家庭もたくさんあると思う。 　その時にその地元における高校の存在というのは，とても大きな意義があるものであるため，入学者が少なくなってきたから，学校がなくなってしまう状況は決して作りたくないというのは地域の切実な願いだと思う。その地域の活性化というところを考えたとき，小中学校だと，その地域の子どもたちを育てているという観点を持ちやすく地域の方々の協力というのはたくさんある。しかしながら，実際の社会に出る一歩手前の高校においては，地域の方々がその子どもたちを育てるという小中学校と同様に教育に携わる機会というのがなかなかない。実際の親が一生懸命子どもを育てようとするのと，同じように地域の方々が高校生の教育に関わるということが町の活性化というところにも大きく繋がってくるし，そのような取組が全国に発信されることによって，その地域が何らかの形で注目を浴びて色々な産業に影響してくることも可能性はあると思う。その地域の活性化というのは，先ほど子どもたちを道具に使っていけないという話をしたが，その地域の子たちが，やはり例えば，全国募集で来た子どもたちによって，本来であれば参加できなかった全国大会に行けるとか，理科科学グループがコンテストに参加できるとか，その地域の子たちが達成できなかったであろう大きなことが可能になるという状況が作るのであれば，これは非常に価値ある全国募集にはなると考える。全般的な話をしていくとなかなか進まないところもあると思うので，その学校の実情に合わせた形で，どのようなことが可能になるかということを考えていった方がよろしいだろうと考えている。
委員長	今回の議論は，入学者選抜の入試制度に関わることであるので，全国募集を実施したいという地域や学校が出た時に入試の制度上保障するということと，もう一つは全国募集を実施した結果，成功するかどうかということは別の議論だと認識している。この専門委員会としては，全国募集が制度としてあって良いものかどうかという観点で検討いただきたい。 　それから，他の方法はないのか，リスクの予想というところも，意見がでているところだが，その他，このようなリスクがあるのではないかという点があったら，意見を願いたい。
葛西委員	先進的な取組をしている学校に昨年度町の方と一緒に視察に行った際に，先方の高校の校長先生が言っていたが，全国募集を実施する上で，その市町村の財政的なバックアップも含めて，全面的な協力体制というのは絶対必要なことだが，一方で問題としてはその地域で様々な家庭的な問題を抱えた生徒も受け入れていくことになってくるということ。そこで発生した生徒指導上のいろいろな問題，例えば，寮で問題を起こしたり，或いは地域で住民とトラブルになってしまったりとか，そのようなときに一体誰が責任を持って，その生徒を指導していくのかというところで，基本的にはもちろんその学校で指導するものの，例えば起きたトラブルが元で，人間関係が壊れてしまい寮にいられなくなってしまったといった場合等について，その生徒をその寮から出してしまうということは，対応としては簡単なことであるものの，今度は出された生徒をどのようにして，その地域でまた受け入れて，住む場所を確保していくのかといったところが非常に難しいということであった。 　先ほどから，全国から受け入れた生徒に対しては責任を持って３年間受け入れて育てていかなければならないことを考えた上で，生徒指導上の問題といったトラブルを抱えた生徒，それをその地域の市町村といった行政サイドの方で面倒見るとともに，学校の方でも一緒に面倒見ていかなければならない。そのようなところまで制度設計というものをしておかないと，責任を持って生徒を受け入れるということはできないのかなと考えており，町の方々ともこの点については共有しているところである。
委員長	生徒指導上のことでエネルギーがかかるということはもちろんだが，報告の中にもあったが，その財源の問題，例えば寮を作るのかどうするのか。財源の方については市町村だけではなくて，県でもという可能性というのはあるのか。ここで審議することではないのかも知れないが，気になったので，意見を願いたい。

松本教育次長	現在，寮を持っている高校は２校ある。２校とも農業高校なのだが，牛とか豚等の生き物を育てる，或いは出産場面に立ち会うということもあり，農業高校のパイロットスクールということで，昭和３０年代に全国に先駆けて行っていた。例えば，寮を持っている高校で，全国募集を地域と一緒にやるということがあるのか。或いは，学校として新たに寮を建てるのかということ。寮を建てる場合には非常に大きな財源がかかってくるため，財源上の壁ということはかなりあると思っている。全国募集を考える上で寮を建てるという考え自体は排除しないが，かなり財源とのバランスや効率という点では難しいのかなと感じている。全国的に見て，その地域の住民の方々の協力で市町村と一緒に受け入れていくというところが多いというのは財政的なことが影響しているのだろう思う。
委員長	寮を含めて，財産として施設が学校もあるということであった。このような全国募集という枠を広げることによって，手を挙げてみようと思う高校や地域が出てくるかもしれない。このような入試制度が呼び水となって地域の活性化を呼ぶということも可能性としてはあるという印象を持った。 他はいかがか。
松本教育次長	すべての委員から発言いただき，県教育委員会のこれまでの取組，例えば普通科と専門学科が単純に学力で輪切りになってしまっており，若干手が回っていなかった専門高校に魅力づくりを磨き上げる一つのチャンスだと思っている。 １ページ目にあったように，長い時間かかるが，これから子どもの数が４０００人減る。そのほとんどが仙台以外の地域のため，高校の統廃合が当然視野に入ってくる。そのような状況の中で，どういう形で残る高校の磨き上げをしていくかということは今の段階では我々も答えを持ち合わせていないので，全国募集の運用等も含めて，重要な課題になるということを改めて認識させていただいた。 本日発言いただいた中で，賛成の意見ではあるが，その裏側にはリスクが含まれているということがあったかと思う。例えば多賀城の防災に関する学科は全国で２つしかないが，倍率の高い地域に高校が所在するのではないかということ。或いは部活動については練習環境の担保や指導者の長らくいる，或いは必ず確保されるということが公立高校で可能なのかということ。それが可能であるなら全国募集もやれるという話として取るか，それは難しいからやらないほうがいいと取るかということで，県教育委員会の方でいくつかの観点で整理することができる。 今日，発言がなかった部分も含めて，こちらで焦点を整理して次回提案したものを基に議論を深めていただくことになるかと思う。 １番の学校の魅力アップと２番の地域の活性化のところはセットでプラスに作用するようにやるべきだと感じている。３番の特色のある学科，４番の特定の部活動については表裏一体のところがあるので，整理が必要。条件なしというのは，そこ概ね却下になっているのだろうと思っている。繰り返しになるが，３番，４番のところについて整理させていただきたい。 葛西委員から話が出ていた学力ということだが，その地域における学力向上というのが１つの課題なのだと思う。学力ということで全国募集をかけるとなれば，仙台駅の近郊や地下鉄駅の近いところに進学校があって，そこに全国募集を導入して宮城の隣県から生徒を持ってくるっていうようなことが例えばできるが，それは今視野に入れてない。委員の方もおそらくそれは賛同しないだろうと思い，提案には入れていない。一方，地域においては学力といっても学力の確保が課題なのだと考えている。学力の確保を保障するというのは県教育委員会の責務だと思っている。ただ，塾などが地域にない地域において，地域の協力を得て指導員を確保して公営塾を実施することは１つのそういう取り組みだが，それが売りで全国から公営塾を確保するために来てくれという話とはちょっと違うだろうと私は受けとめており，地域の良さを発信していくということがどこまでできるかという視点が必要なのかなと考えている。 引き続き学力の確保ということについては，教育委員会として取り組んで参りたい。
委員長	発言に感謝する。 学力については従来のペーパーテストで，いわゆる知力みたいなものとして捉え，他の能力と分ける考えがここ１０年で進んできている。非認知能力ということで，グリッ

	トのような粘り強さやマインドセットとかといった議論，これらは探究的な学習によって育ってくる。ドリル等の反復練習で育つ学力もあるかもしれないが，実はそういった生きざまに関わる部分，或いは体験学習の方に関わる部分で，ペーパーテストの得点も同時に上がってくるということがあろうかとも思う。そのようなエビデンスも今後視野に入れながら，学力のとらえ方について従来よりももう少し豊かにとらえていってもいいのではないかと考える。また，それは地域の活性化とか，地域コミュニティーとの交流の中で子どもたちに育ってくるものと思っている。 　ちなみに，個人的に学力スコアの経年変化を調査しているが，民間のＣＲテストのようなもので，小学校から中学校まで経年の８年で，偏差値は２０ぐらい変動する子どもが１５％ぐらいいて，偏差値の１０つまり１σ（シグマ）動く生徒も７５％ぐらいいるという偏差値の変動に実は驚いているところである。もちろん，家庭環境等の影響も，大規模調査で指摘がされているが，特に中間のところの３分の１の変動はかなり大きいものがあると驚いているところである。つまり児童生徒のその能力というものの考え方は知力も含めて非常に変化しているということである。近年のニューロサイエンスの研究では，一生涯にわたって脳は構造的な変化を起こしているというのが最近の知見である。それに加えてノーベル経済学賞を取ったヘクマンの非認知の研究が相まって，非認知研究が今非常に注目されているところあるので，そのようなことを学校側や教育関係者が発信しながら，地域を元気づけていく制度があっても良いと思っている。 　それでは，委員の皆様に，様々な意見を頂戴したこと感謝する。 　では以上をもちまして審議を終了する。 　それでは次回以降の予定について確認する。 　まず本日の会議は公開で進めていますが，次回の専門委員会について公開非公開の取り扱いについて確認したい。
事務局	（次回の専門委員会の審議について公開・非公開の確認）
委員	（公開で異議無し）
委員長	それでは，事務局にお返しする。
事務局	（次回の予定について事務局から説明して，専門委員会は終了）